都留興譲館高等学校 PTA新聞

都留興譲館高等学校
山梨県都留市上谷 5-7-1
TEL 0554-43-2101
FAX 0554-43-5056
印刷：㈲印刷エトリ

PTA活動を振り返って

PTA会長　清水浩子

令和六年度ＰＴＡ会長を務めさせて頂きました清水です。年度途中での会長職を受けることになり不安もありましたが、理事の皆様保護者の皆様、中島校長先生をはじめ諸先生方のご理解とご協力のお陰で職務を行う事が出来ました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

本年度のＰＴＡ活動を振り返りますと、コロナ禍が一段落し学校行事など以前の様に一歩ずつ戻る中、保護者も学園祭など学校へ足を運ぶ機会が増え大変うれしくもあり、日常の当り前な事が幸福であることを身にしみて感じた気がいたします。

そんな中、令和六年元日に起きた能登地震九月の能登豪雨と二度にわたる災害に見舞われた出来事は大変衝撃を受けました。そこで本校でも何か支援できる事はないかと理事会で提案したところ理事の皆様の賛同をいただき支援することになりました。理事会での案を基に公立高校一校にしぼり、今後につながる関係を築いていけるようにと考え、石川県立輪島高等学校に義援金を届けることにいたしました。なぜ輪島高校になったかと申し上げますと、中島校長先生と石川県のつながり、本校の川添先生が能登へボランティアに参加されていること、その関係で〝まるごみJAPAN〟と言うボランティア活動をされている向井耕作さんをご紹介いただき賛同、ご協力をいただき決まりました。またその後にわかったのですが、本校の名取先生が以前より輪島高校の海外の観光客へ通訳ボランティア活動に注目されやり取りされていたと伺い、知らず知らずご縁があったのに驚きました。ここで輪島の様子もお伝えすることにします。能登へ向かう車窓からは崩れたままの山肌は荒々しく、手つかずの集落は住むことはできず、道路はデコボコしたところが多く復旧がなかなか進んでいません。訪問した輪島高校は校舎が傾いたままの状態で何とか使える教室で生徒達は明るく元気に学んでいました。輪島高校の平野校長先生のお宅は朝市通りにあり火災は免れたそうですが住む事は出来ないそうです。そんなご実宅から救出したピアノは今学校の一階で皆がいつでも弾けるように置かれています。輪島塗の工房にも伺い、被災した漆器を復活させている様子など伝統の技を見学しその姿に技の伝承の大切さや大変さ、災害に負けない力強い気迫が伝わってきました。海女をされている方にもお話を伺いました。能登の海は豪雨などの瓦礫や泥で潜れる状態ではなく、一日も早く潜る環境を取り戻すために活動されているそうです。今回能登支援に訪問し、多くの事に気づかされました。災害の恐ろしさを目の当たりにした時どう動きその後どう生きていくべきかを考えさせられました。今回結ばれた輪島高校とのご縁が、生徒、保護者の間につながれ末永く続いていくことを願っています。

最後にＰＴＡ活動がこれからも生徒の為によりよい活動が出来ますようご協力の程よろしくお願いいたします。

石川県輪島高等学校支援訪問

富士急行線通学定期券の割引嘆願

「向上〆興譲館」

校長　中島利秀

令和6年度、本校では都留興譲館高校の教育活動を地域の方々に理解してもらうために「向上〆興譲館」のキャッチフレーズの元、近隣の中学校を中心に本校の魅力をアピールする活動を行いました。ここではＰＴＡの皆様にその内容を紹介させていただきます。

「都留興譲館の魅力」

○生き抜く力の向上

興譲館では社会で生き抜く力が向上します。具体的には①自分にはできるという意識（自己肯定感）と②自分は必要とされているという意識（自己有用感）が向上します。

○取り組み

そのための取り組みは①わかる授業の推進による学力向上（少人数教育・ICT利活用・都留文大や地元企業との連携・各種学習会・キャリアパスポートの活用等）②地域の方々とのふれあい（地域との連携・地域貢献活動・ボランティア活動・地元中学校との交流）③豊かな学校生活の推進（生徒指導委員会・心の教育サポート委員会・スクールカウンセラーの活用）等があります。

○活動の成果

①学力の向上

活動の成果として学力が向上しています。進学面では、昨年度までの過去3年間で国公立大学31名、私立大学のべ247名の合格者を排出し、入学時の成績と比較して学力が大きく向上しました。さらに就職面でも、過去3年間でファナック、テルモ、シチズン時計、牧野フライス等の東証プライム企業をはじめ県内企業を中心に166名が就職しています。就職希望の生徒は日々の学習に加え資格取得に励み、学力と技能が大きく向上し、昨年度、就職第1希望合格率90％を達成しました。

②やる気の向上

さらにやる気の向上が見られます。昨年度末に実施した生徒アンケートによりますと次の三つの質問への肯定的な回答が8割を超えています。「自分の目標に向かって努力している　83％」「前向きに日常生活が送れている　83％」「学校へ行くことが楽しい82％」。この回答から多くの生徒が目標を持ち、前向きに、楽しく学校生活を送っていることが読み取れます。

○部活動での向上

本校の運動部活動の顧問や指導者は専門家あるいは経験者であり、知識と経験を生かした実践的な指導が受けられます。そして、広いメイングラウンド、野球専用グラウンド、各競技専用フロアを有する体育館、屋内相撲場、主に陸上競技部が使用している、濡れても滑りにくく水はけが良い合成ゴムからなるターターンの中庭等、競技環境にも恵まれています。

○少人数教育で向上

本校の教員数は他校と比較して多くなっています。本校の昨年度時点での生徒１００人あたりの教員数は約16人と県内県立高校平均（約9人）を大きく上回っています。そのため、近隣中学校の先生方のアンケートでは「面倒見が良い興譲館」と評価されています。

本校では「地域の子供たちを地域で育てる」ことを目標に、都留市教育委員会及び近隣の中学校、地域の方々等と連携し、質の高い教育活動を推進し、発信することで魅力「向上」に努めて参ります。ＰＴＡの皆様方にはこの活動をご理解いただくとともにご支援・ご協力いただけますと幸いに存じます。

生徒にエールを

教頭　中村智司

ＳＮＳの急速な普及によって、私たちの社会は大きく変化しています。しかし、私たち大人が想定するＳＮＳの使われ方と、生徒たちが日常的に体験しているＳＮＳのあり方には、大きな隔たりがあるようです。

一般的に、大人はＳＮＳを情報収集や知人との交流といった「目的」を意識し、利用時間や状況をわきまえて活用しています。一方、生徒たちにとってＳＮＳは、時間的な区切りがあいまいな「常時接続の生活空間」であり、友人関係の構築や自己表現、承認欲求の充足などが絶えず流れ続けています。そのため、新たなサービスやアプリが次々に登場し、大人が理解した頃には生徒たちはすでに別のＳＮＳを活用していることもあるでしょう。

こうしたギャップは、コミュニケーションの前提やリスク認識の違いを生み出します。生徒たちは同世代の反応や共感を即座に求め、ＳＮＳ上でのやりとりを当たり前の生活要素として捉えていますが、そこには誹謗中傷や情報漏洩、仲間外れなどの危険も潜んでいます。ＳＮＳは表現やつながりの可能性を広げる一方で、管理が難しいリスクを内包しています。大人はその点に薄々気づいてはいるものの、生徒たちの感じ方や価値観を十分に理解しないまま、一方的なルールづくりや押しつけを行うことも少なくありません。その結果、問題が解決しにくくなるケースもあります。

では、私たち大人はどう行動すべきでしょうか。まず、出発点は「対話」です。対話といっても、ただ「ルールを守りなさい」と説くのではなく、「なぜそのＳＮＳが好きなの？」「どんな投稿が楽しいと感じるの？」といった問いかけから始めることが効果的かもしれません。また、「もしＳＮＳで嫌なことがあったら、どう感じる？」「そのときはどうすれば解決できそう？」と、具体的な状況を想定したうえで、生徒が自分の気持ちや考えを表現しやすい場をつくれることが望ましいでしょう。このような質問は、日ごろの何気ない会話や、食事中、通学前の短い時間など、日常のちょっとした機会に取り入れることができます。

学校では情報モラル教育やトラブル対応策について指導を進めていますが、ご家庭でもこうしたオープンな対話を重ねることで、生徒は安心して悩みを打ち明け、共に解決策を考えることができるはずです。たとえば、ＳＮＳ上での発信内容について「これ以上は危険」といった具体例を生徒と話し合ったり、フェイクニュースや誹謗中傷を見かけたらどう受け止めるかをあらかじめ共有したりすることで、生徒自身の判断力を養う手助けができるでしょう。

また、ＳＮＳは悪影響だけでなく、自分の考えを整理して発信する力や、フェイクニュースに惑わされない情報リテラシー、他者を尊重し合う態度など、将来必要となるスキルを育む場にもなり得ます。国際交流や多文化共生が当たり前になるこれからの社会で、こうした力は不可欠です。

私たち大人は「指導者」として押しつけるのではなく、「理解者」や「対話者」として生徒の成長を支え、共に学び合っていきましょう。保護者・学校・地域が連携し、日常的な対話や具体的なたとえを介して、生徒がＳＮＳを前向きに活用し、健全なつながりを築ける環境を整えていくことが、これからの社会を生きる生徒たちへの何よりのエールになると信じています。

一人で過ごす時間こそが本当の「価値」を生み出すということ

三学年主任　望月　宏紀

これからさまざまな分野や社会で活躍をしていく皆さんに、まず伝えたいこと、それは「一人で過ごすまとまった時間を持ちなさい」ということです。現代社会で求められるスキルの一つとして、「コミュニケーション能力」を挙げることができます。他者からの支援や援助を必要とするとき、「コミュニケーション能力」は確かに重要な能力の一つです。しかし、社会で必要とされる能力はそれだけではありません。世の中の大部分の職業では、自分と対峙しながら葛藤し、一見無駄だと思われる時間を費やしながら得ることのできる知識や理解というものが必要となります。知識を獲得するためには、冒頭で述べた一人で過ごす時間、つまり、「周りから分断されないかたまりの時間」を持つことが不可欠といえるでしょう。特に、すぐに二十代を迎える皆さんは、近い将来、職業について真剣に考え、選択していかなければなりません。一人でいる時間を意識的に持ちながら、本当に価値のあるものを探す人間に成長していってほしいと思います。

それからもう一つ、これから就職する人、職業選びを始める皆さんに、特に参考にしてほしいことがあります。思想家である吉本隆明さんは著書の中で、「どんな仕事でも、経験の蓄積がものを言う。持続することがとにかく大切なのだ」と述べています。さらに、「持続的に何かをして、その中で経験を積んでいくことが必要ないような職業は存在しません。ある日突然、何者かになれるということはないということです。人に満足をもたらす仕事には熟練が必要です。才能がどうこう言っても、最低十年続けないと一人前にはなれません。逆に言うと、十年続ければどんな職業でも何とかなります。クリエーターなら毎日、五分でも十分でもいいからアイデアを考える。そしてそのアイデアを書く。何も書けなかったとしても、とにかく机の前に座ることだけはやってみる。そんな人は百パーセントものになります。これはどんな仕事でも同じです。どんなに頭のいい人でも、毎日継続して『手を動かす』『手で考える』ということをしなければ五年もすれば成立しなくなります。のんびりやろうが、普通にやろうが、急いでやろうが、とにかく十年という持続性があれば、必ず職業として成立します。熟練に向けて何かを始めるところにこぎつけてしまえばこっちのものです。充分な熟考や熟練なしに成り立つ専門はただの一つもありません。」とも述べています。

九期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今を生きる皆さんが新しい時代の担い手として、そして、熟練した職業人として生きることを切に願います。

（引用・参考「ひきこもれ」ひとりの時間をもつということ：著者吉本隆明）

高P連関東大会に参加して

教頭　伊藤　伸一

令和６（２０２４）年７月23日と24日の二日間、千葉市の幕張メッセ国際会議場コンベンションホールで開催された「第70回関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会千葉大会」に本校の代表として参加しました。本年度の大会スローガンは「青い海　紺碧の空のもと　伸ばそう　子供たちの個性を　育もう　子どもたちの未来を　光り輝く白い雲のように」でした。

初日は照り付ける太陽の中、開会式に先立って、アトラクションが行われました。開催県千葉県の高校生の吹奏楽部の演奏と、生涯学習事業の一環から生まれた柏市のＮＰＯ法人のダンス、いずれも情熱とエネルギーを感じた素晴らしい時間となりました。その後、表彰式・大会宣言文が採択され、初日の記念講演と進みました。一般社団法人スクールポリス理事の佐々木成三氏による『高校生の問題行動』という演題でした。埼玉県警で22年間勤務して得られた経験やテレビコメンテーターで磨かれた話術は秀逸で、２千人の聴衆を魅了していました。ＳＮＳとの上手な付き合い方、ぶれない自分を持って情報過多の時代に立ち向かっていく方策の在り方について、わかりやすく説明していただきました。

２日目は、第1分科会「学校教育とＰＴＡ」、第2分科会「進路指導とＰＴＡ」、第3分科会「進路指導とＰＴＡ」、第4分科会「家庭教育とＰＴＡ」、第5分科会「千葉県のコミュニティースクールの取り組み」というテーマを基に５つの分科会が開かれました。私が参加した第1分科会では、山梨県立身延高等学校ＰＴＡ会長望月亜莉沙さんによる「地域とともに歩むＰＴＡ活動」と題して発表が行われました。その中で主なＰＴＡ活動として、①フードドライブ：平成28年に県高Ｐ連の呼びかけに応える形で始め、以後毎年１回行っています。これまでは、期間終了後本部役員が仕分けをして、フードバンク山梨に届けていました。今年度からはＪＲＣ委員会の生徒が仕分け等に協力してくれます。②ライフミュージアム：平成18年度に、当時の美術教員の発案で、学校を美術館に見立てた「学校美術館構想」展を１週間の会期で開催しました。平成20年度からは、従来の催しに、家庭科の授業作品の展示、福祉講演会などを加え、「ライフミュージアム」と称して、休日には、美術部員や家庭クラブ員によるワークショップなども行いました。③ウォーキング大会：長年続けられてきた強歩大会が、新型コロナウイルス感染症の流行による中止や規模縮小を機に見直され、令和３年度よりウォーキング大会という形で、行われることになりました。ＰＴＡでは、コース上に立って生徒の交通指導・安全指導にあたっています。

今後のＰＴＡ活動の課題として、身延高校のＰＴＡ活動は、「できるときに、できる人が、できることを」行うという形でなるべく負担感なく参加できるようにすすめてきました。しかし、さまざまな要因から会議への出席や学校行事の協力などに人が集まりにくくなってきています。そこで、今後は、各種クラウドサービスなどを利用することによって学校と保護者等を直接結び、双方向のやり取りができるようにしていくことが大切ではないかと考えます。

ＰＴＡ活動の在り方が問われている昨今、身延高校の発表は示唆に富んだものであり本校でも取り入れる発想もあるのではないかと感じました。また、全体を通して各高校のＰＴＡ役員の皆さんから醸し出されるエネルギーを強く感じた２日間でした。

新たな力

二学年主任　奥脇　智英

「沖縄と言えば？」と問われたとき、「青い海」「豊かな自然」「リゾート地」など、旅行感覚で答えると思います。なぜなら、今現在、平和で豊かで誰もが平等に生活ができているからです。豊かな環境で過ごせる私たちがなぜ沖縄に魅力を感じるのでしょうか。それは、ただ単に恵まれた自然を利用してリゾート地にしたからという理由だけではないような気がします。きっと沖縄の人々の人柄にあると私は思います。

沖縄はかつて琉球王国と呼ばれていました。琉球王国の象徴として政治、経済、文化の中心地であった首里城は、過去に五度、失火や戦乱で焼失し、そのたびに再建されてきました。印象に残るのは第二次世界大戦の沖縄戦で首里城壊滅、記憶に新しいのは２０１９年10月31日の火災による焼失。何度失っても再建を試み、見事に以前の輝きを取り戻してきました。

修学旅行の四日目、私たちは首里城の見学に行きました。守礼門でクラスごとに写真撮影をし、いよいよ見学です。石畳を歩き、様々な門をくぐり目の前にあったのは正殿再建工事エリア。中を見ると宮大工の方々が完成に向けて作業を進めていました。その様子は、真剣な面持ちで鉋を動かしたり、部署ごとに笑顔で話し合いをしたり、張り詰めた空気感や温かな雰囲気はガラス越しの私たちにも伝わり今後の糧となりました。

沖縄の人々の災難を何度も乗り越える力は、実直な姿勢だけでなく、沖縄人特有の温かさや朗らかさ、いつ何時も笑顔を絶やさない人間性にあるのだと確信しました。そんな沖縄の方々とふれ合い、私たちも二色に輝く力をいただいて帰ってきました。

再建完了予定は２０２６年の秋頃だそうです。

都留興譲館高校で過ごして

旧生徒会長　小宮　正希

私の高校生活は、部活動や生徒会、勉強に加え、習い事の習字やピアノ、囲碁やお神楽保存会など多様な学びの機会に溢れていました。私にとって、高校生活を生きていくとは、そうした環境において得た感動を、自分のやり方で表していくことでした。

部活でいえば、強豪校の選手の活躍をみて、また習字では、先生のアドバイスを聞いて、自分にはない価値観、世界を感じ、心を動かされてきました。その世界を再現しようとすることは大きな労力を必要としますが、やはり魅力を感じました。しかし、その感動を単に部活なら部活、習字なら習字、と打ち込めるほど、私は取捨選択を得意としていないですし、一つに絞っても続けられるほど私が強い人間でもないと知っていました。だから私は、多様な環境で学んでいくこと、すなわち多様な人々と協働していくことを選び続けてきました。得た感動をなんでもいいからぶつける、部活で得た感動を勉強にぶつけ、習字で得た感動をピアノにぶつけ、地域のお神楽の持つ楽しい風情で囲碁を打つことで、学びを楽しみ生きてきました。それは本校のゆとりある環境だからこそできたように感じます。

このように私は、一つの環境から得た感動を多様な環境で表していくことを続けてきました。一つのことに集中せず怠けているようにも思えますが、怠けてきたからこそ、生きてこられたとも高校生活を終えようとする中で思っています。興譲館に進学してよかったです。

これぞ青春

新生徒会長　外川　恵介

高校生活でたったの三回しかない興譲祭と体育祭は今年度も無事に成功することができました。

興譲祭では、一日目に都の杜うぐいすホールで、吹奏楽部、箏曲部の発表、各クラスのステージ発表が行われました。二、三年生はダンスやライブをするクラスが多く、一年生では劇をするクラスもありました。表情からは楽しさの奥に緊張が見えましたが、放課後や休日の時間を練習に費やしてきた成果か出ており、素晴らしい思い出になりました。二日目は学校に戻り模擬店の活動をしました。どのクラスも切磋琢磨していて、フォトスポットや射的など、どれもわくわくするような店ばかりでした。ある工業科のクラスは、工業系の知識を生かし電気を使っていて、他のクラスにはできないことをしていました。自分たちなりの個性が表れていて素晴らしかったです。

体育祭では、練習時間が少なかったと思いますが、各クラスで作戦を考えて一位を目指して頑張っていました。自分たちでデザインしたクラス旗を掲げ、クラスＴシャツを身にまとい、一人一人の心が熱くなっていました。そんな中でも安全に競技を行おうとしてくれる人がとても多くて、大きなけがをする生徒が一人も出ませんでした。ご協力ありがとうございました。

また、体育祭では第十二期生徒会本部が初めて中心となって運営をしました。企画から準備、当日の運営までスムーズに行うことができて良いスタートが切れました。これからは、卒業アルバムを見たときに、また一年生に戻りたいと思えるような学校を目指し、皆さんの青春の一ページを築くお手伝いができればと思っています。全校の皆さんの意見を頂き、力を借りながらではありますが、生徒会本部役員一同、全力をつくしていきます。来年度もよろしくお願いします。

編集後記

広報委員長　網野　直美

今年もＰＴＡ新聞の発行の時期となりました。三年生は卒業、一・二年生は進級と大きな節目の時期ですね。見守るご家庭の方々にも、いろいろな思いが交錯し慌ただしいですが、心機一転、新たな明るい未来に向けて心躍る季節です。

ここ何年かコロナ過の影響で生徒たちの活動にも制限がありましたが、今年度は生徒たちの活躍が勢いよく見られ、それに伴いＰＴＡ活動も活発になってきたように思いました。そして共に活動してくださり、支えてくださった先生方のお言葉を、今回はこの新聞で伝えることができました。広報部一同、少しは活動のお手伝いが出来たのかなと感じています。今後も生徒達の高校生活がより良いものになりますよう、心からお祈り申しあげます。

最後に新聞発行にあたり、原稿のご協力を頂いた方々に深く感謝申し上げます。